

平成21年度「専修学校を活用した就業能力向上支援事業」成果報告書

コース名	女性対象コース		
事業名	介護職員スキルアップ（介護福祉士資格取得）のための教育プログラム		
法人名	学校法人三幸学園		
学校名	大阪医療秘書福祉専門学校		
代表者	鳥居 秀光	担当者 連絡先	佐藤 弘之 TEL：06-6300-5767
1. 事業の目的			
<p>現在世界的な不況の影響により雇用情勢が悪化する中でも、介護福祉分野における人材不足は顕著である。介護業界で就業しようとする場合、ほとんどの現場では最低でもホームヘルパー2級などの公的資格を有することが必須であるが、介護業界においては必ずしも業務能力が優先されず、取得資格を重要視する“資格格差”が生じている。“資格格差”は給与などの待遇面だけにとどまらず、再就職の機会を奪うこともあり得る。今回の事業の目的は、特に子育てなどにより一旦就業を中断した女性に着目し、より良い条件で再就職に臨めるよう国家資格である介護福祉士取得を確実にするためのものである。</p>			
2. 事業の実施に関する項目			
①カリキュラムの概要（目的・科目数・内容・期間）			
《目的》			
<p>介護福祉士国家試験〔一次試験〕である筆記試験に向けての対策と、〔二次試験〕免除を受けるための介護技術講習会を実施し、介護福祉士国家資格取得を目指す。また修了後は介護業界への再就職を目指す。</p>			
《科目・内容》			
<p>■ 筆記試験対策講座</p> <p>社会福祉概論、老人福祉論、障害者福祉論、精神保健、老人・障害者の心理、家政学概論、レクリエーション活動援助法、医学一般、社会福祉援助技術、リハビリテーション、介護概論、介護技術、形態別介護技術、模擬試験</p>			
<p>■ 介護技術講習会</p> <p>介護過程の展開、コミュニケーション技術、移動の介護等、排泄の介護、衣服の着脱</p>			

の介護、食事の介護、入浴の介助等、総合評価

■ キャリアカウンセリング

《期 間》

平成21年10月17日(土)～平成22年 1月23日(土)

②受講者の募集方法(手法・期間・効果)

《手 法》

■ 福祉施設・事業所への営業

■ 当校実施講座(筆記試験対策講座・介護技術講習会)既申込者への周知(DM発送)

《期 間》

平成21年 9月 1日(火)～平成21年 9月27日(日)

《効 果》

(1) TEL問い合わせ21件

(2) 応募者数10名

(3) 合格者数 8名(※不合格者・・・男性 1名、就業者 1名)

③受講者の状況

《受講者の内訳》

年 齢 30代:2名 / 40代:3名 / 50代:3名

《受講状況》

出席率 50%未満:1名

50%～75%:1名

75%～100%:6名

④受講者の意識調査等

《応募動機》

- ・ 派遣社員としてではなく、正規職員としての勤務を望むため
- ・ 確実に介護福祉士資格を取得し、再就職を果たしたい
- ・ 福祉施設での勤務を希望しており、そのためにも介護福祉士は必須資格であるため
- ・ 自分自身に自信をつけて再就職したい
- ・ 介護技術・知識の再復習をし、勤を取り戻して就職を決めたい など

《受講満足度》

とても満足:5名(62.5%) / 満足:2名(25%) / 普通:1名(12.5%)

不満:0名(0%) / とても不満:0名(0%)

《受講感想》

- ・ それぞれの科目ごとに専門の講師がついて親身になって指導してもらい、知識を深めることができた。
- ・ 筆記試験対策は一科目ずつ学ぶスタイルだったので、知識がしっかりと身についた。
- ・ 課題を解いてすぐその場で解説をしてもらえたので、間違っているところも「なぜ間違っているのか」を知り、繰り返しのミスを防ぐことができた。
- ・ 知識を教えてもらうだけでなく、勉強の仕方のコツを教えてもらえて、大変参考になった。
- ・ 少し現場を離れていたのが介護技術などもうろ覚えになっていたが、技術講習会を受講することで、当時の振り返りができ、自分に自信を持てるようになった。
- ・ 何年も介護職をしてきたのに、できていなかったことや忘れていたことなどを思い出すことができた。
- ・ 基本的な介護テクニックの大切さを改めて確認することができた。
- ・ 普段行っている介助を「いかに意識して行うか」の難しさを痛感した。
- ・ 体調確認の大切さがわかった。

⑤受講後の状況（修了者数・就職率）

《修了者数》 8名

《合格者数》 不明（※平成22年 3月31日発表予定のため）※1名受験せず

《就職率》 3名就職（正規職員）／2名就職活動中（試験結果待ち）／3名無回答
平成22年3月15日現在 就職率37.5%

3. 事業の評価に関する項目

①当初目的の達成状況

当初の目的は簡潔に言えば「介護福祉士国家資格を取得し、資格を活かして再就職をする」ということだが、資格取得のための大前提でもある『質の高い介護者の育成』ができたことと認識している。大切なことは表面上だけの介護福祉士を大量に排出することではなく、中身を伴った介護福祉士をより多く生み出すことであると思われる。その意味からすれば当校の指導においてはただ単に丸暗記で知識・技術を植え付けるものではなく、そうなる根拠を自分自身に落としこみ、どのような角度から出題されようと答えが導き出せるような応用力を身につけてもらうことができた。

②事業の成果及び改善点

今回のプログラムは、介護に関する知識・技術を得るための機会であり、これらが自分

のものになってこそ初めて国家資格である「介護福祉士」を得ることができるのだが、学び取るものが「試験合格のための知識・技術」ではなく、あくまで「現場で生きるための知識・技術」でなければ資格を取得したとしても薄いものとなってしまいうため、指導の際には受講者自身の介護体験等に絡め、現実にとし込んだ指導を心掛けた。知識・技術をただ「覚える」のではなく、「なぜそうするのか」という根拠を明らかにし、どのような場面でも臨機応変に対応できる“介護現場で求められる人材”の育成に努めた。事業の最大の成果は『介護福祉士国家試験合格』ではあるが、それ以前にそれに相当する知識・技術を得、再就職に対する意識と自信が植え付けられた事も大きな成果と考えられる。

また改善点としては、実務経験者を受講対象としていたため、実務年数や経験値などにより理解度に差が生まれることがあった。その点については受験に対する意識を「個人として臨む」のではなく、「チームとして臨む」という方向にシフトさせ、お互いの知識に欠けるようなことがあれば、情報を共有して埋めあうなどの工夫を自発的にしてもらうことで補った。

③次年度以降における課題・展開

前項に挙げたとおり、課題としては受講当初より個人差があることであり、集団で受講する以上は何らかの策を講じなければならないが、まずは個人がどのような経歴で今まで介護業務に携わってきたのかを指導する側が理解し、その上で授業の組み立て・進め方などを決定していくことが重要であると考えられる。

④成果の普及

今後「介護職員は介護福祉士を取得していること」が望まれること、また平成24年度に介護福祉士受験資格等が変わっていくことから、現段階で介護福祉士受験資格を有するものがいち早く次のステップへ進めるようサポートしていく体制を整えることが急務であることと推測する。サポート体制とはつまり今回のプログラムそのものであり、国家資格取得を現実ものにするため、個人では学ぶことのできない合格者（長期業務従事者や介護福祉科講師等）による指導や勉強方法の伝授など、学ぶ環境を提供することが重要であると考えられる。